



交際のネットワークにおける地域とジェンダーの違い

著者	大和 礼子
雑誌名	現代家族にみる家事の実態・意味・感情に関する実証研究(質的調査の実施と分析)
ページ	95-104
発行年	2002-03
URL	http://hdl.handle.net/10112/1314

第8章

交際のネットワークにおける地域とジェンダーの違い

大和 礼子

1. はじめに

この章では、インタビュー対象者がどのようなパーソナル・ネットワーク、特に「交際のネットワーク」(大和, 2000)を持っているのかについて見ていこう。

インタビューの対象者は、表8-1にまとめたように、郡部、市部とも、男女それぞれ5ケースずつ、計20ケースである。ただし市部の男性の3ケースでは、インタビュー中に妻が同席していたので、一部の質問についてはそれぞれの妻の意見も聞いた(表8-1のb)。また1ケースについては、録音のミスにより、この章に関連するいくつかの質問のデータが残されていないため不明であり、その場合は有効ケース数からはずした(表8-1のc)。次に、対象者の配偶関係について見ると、1ケースを除いて他はすべて配偶者がいる(表8-1のd)。子どもについては、1ケースを除いてすべてのケースで、同居あるいは別居の子どもがいる(表8-1のe)。

表8-1 インタビュー対象者のケース数・その他

		(a) インタビュー 対象者の ケース数			(d) 配偶者あり	(e) 子どもあり
			(b) 夫婦インタビ ュの妻を含む 場合	(c) 回答不明 を省く場合		
郡部	女性	5	5	4	5	5
	男性	5	5	5	5	5
市部	女性	5	8	5	4	5
	男性	5	5	5	5	4
計		20			19	19

また対象者とその配偶者の年齢については、表8-2にまとめた。表8-2によると、郡部は夫婦とも65歳以上という対象者が4ケース(10ケース中)、それに対して市部では夫婦とも40歳台という対象者が4ケース(10ケース中)あり、全体的に市部の対象の方が若いことがわかる。

表 8-2 対象者とその配偶者の年齢

	郡部			市部		
	女	男	計	女	男	計
1) 夫婦とも 65 歳以上	2	2	4	-	-	-
2) 夫が 65 歳以上、妻が 64 歳以下	1	1	2	-	2	2
3) 夫婦とも 60～64 歳	-	-	-	-	-	-
4) 夫が 60～64 歳、妻が 59 歳以下	-	-	-	1	-	1
5) 夫婦とも 50 歳台	2	-	2	-	-	-
6) 夫が 50 歳台、妻が 40 歳台以下	-	1	1	2	-	2
7) 夫婦とも 40 歳台	-	1	1	1	3	4
8) その他	-	-	-	1	-	1*
計	5	5	10	5	5	10

* 妻が単身で、50 歳台

2. 親族との交際

(1) 同居親族

まず同居の親族について見ていこう（郡部でも市部でも、親族でない人が同居しているケースはなかった）。表 8-3 にまとめたように、郡部では、「3 世代」と「夫婦 2 人」の世帯が、それぞれ 3 ケース（10 ケース中）で最も多い。また市部と比べて多いのは、「3 世代」と「夫婦＋成人子」の世帯である。それに対して市部では、対象者の中で最も多いのは「夫婦＋未成人子」の核家族世帯（4 ケース）である。これは、市部の対象者が夫婦とも 40 歳台が最も多いことの反映である。市部では続いて「夫婦 2 人」の世帯（3 ケース）が多い。全体的に郡部の対象者の方が、自分自身が老親の立場で子世代と同居している人や、自分自身が子の立場で老親と同居している人など、老親の世話を同居家族がすることになるだろうような世帯形態で生活している人が多いといえる。

表 8-3 世帯形態

	単身	夫婦 2 人	核家族（夫婦＋未婚の子）		子世代＋老親	
			夫婦＋未成人子	夫婦＋成人子	夫婦＋老親	3 世代
郡部（計 10）	0	3	1	2	1	3
市部（計 10）	1	3	4	0	1	1
計 20	1	6	5	2	2	4

(2) 別居の親との交際

次に別居親族との交際について見ていこう。まず別居の親については、表 8-4 に示したように、健在である別居の親の数は、郡部では 4 人（夫婦とも健在である場合は、夫婦で 1 人と数えた。以下同様）、市部では 13 人である。市部の対象者のほうが若いので、こ

のような結果になったと思われる。そのうち郡部では、同じ市・町内に住んでいる親（親夫婦）が4人中2人、近隣の市・町に住んでいる親が同じく4人中2人で、すべての親が近距離に住んでいる。一方市部では、同じ市・町内に住んでいる親が13人中5人、近隣の市・町に住んでいる親が13人中2人で、近距離に住んでいる親をあわせて13人中7人で約半分に過ぎない。このことから、別居の親との距離は郡部の対象者のほうが近い。郡部の対象者は地元出身の人が多いのに対して、市部の対象者は他出してきた人が多いことがわかる。

別居の親との接触頻度は、インタビューの結果によると、近距離（同じ市・町内や近隣の市・町内）に親が住んでいる場合には、週1回～月2回くらいである。郡部と市部の差はあまりない。遠距離（近県や、近畿地方以外の都道府県）に親が住んでいる場合（これはすべて市部の対象者である）は、年2～3回（盆、正月、ゴールデン・ウィークなど）親元を訪ねるといのが、多くの対象者に見られた別居の親との交際のあり方である。遠距離の親との電話での接触（これもすべて市部の対象者である）は、週1回～月2回程度行われていることが多い。

表8-4 健在である別居の親の数

		郡部（計4）	市部（計13）
近距離	同じ市・町	2	5
	近隣の市・町	2	2
遠距離	近県	-	2
	近畿地方以外	-	4

* 夫婦とも健在である場合は、夫婦で1人と数えた。

（3） 別居の子どもとの交際

別居の子どもについても、近距離（同じ市・町内や近隣の市・町内）に子どもが住んでいる場合は、週1回程度会うことが多い。特に、近くに住む娘は、頻繁に親の家を訪ねている。それに対して遠距離（近県より遠く）に住む場合は、たとえ娘でも、親子が会うのは、年2～3回であり、盆、正月、ゴールデン・ウィークなどである。郡部と市部の差はあまりない。

（4） 別居の兄弟姉妹やその他の親戚との交際

兄弟姉妹やその他の親戚との交際は、距離のほかに、性別や出生順位も影響するようである。まず市部では、近距離（同じ市・町内や近隣の市・町内）に住んでいて、しかも姉と妹、あるいは姉と弟といった関係の場合、月1回あるいはそれ以上と、かなり頻繁に会い、電話でもよく話している。しかしながら、近県より遠くに住む場合、あるいは近くに住んでいても男兄弟の場合は、年1～2回会うというのが多いようである。また、兄弟姉

妹以外で親しく付き合っている親戚として、特定のおばやいとこをあげた人があったが、それは2ケース（10 ケース中）のみであった。このような少数の例外を除いては、その他の親族との付き合いは、冠婚葬祭などに限られていた。

それに対して郡部では、女性回答者は近くに住む兄弟姉妹とは月1～2回会うと答えた人が多いが、男性回答者は、近くに住む兄弟姉妹がいなかったり、いても年2～3回と答える人が多かった。郡部の回答者が高齢で、兄弟姉妹が健在でなかったり、たとえ健在で近くに住んでいても、健康上の理由や交通の便の悪さのため、会いに行くのが難しいといったことがその原因であろう。また、親しい親族として兄弟姉妹以外のいとこやおじ・おばなどをあげたのは4ケース（10 ケース中）で、この点においては市部よりやや多い印象を受けた。ただしそのいずれもが、同じ町内に住んでいた。それ以外の親族との交際については、付き合いなしや冠婚葬祭程度という人が多く、この点では市部と大きくは変わらなかった。

（5） 別居親族との交際についてのまとめ

以上から、表8-5のように、別居の親族との交際は①～④の4つに区分できる。

表8-5 別居親族との交際の郡部と市部の違い

	交際の選択性	接触のしやすさによる影響	郡部と市部の違い
①親・子	非選択的	影響されにくい	違いはない
②兄弟姉妹	やや選択的	影響される	市部の方が、交際が多い。 （対象者の年齢が若く、交通機関が発達しているから）
③いとこ おじ・おば	やや選択的	影響される	郡部の方が、交際が多い。 （近くに住んでいることが多いから）
④その他の親族	非常に選択的 （日常的に交際する必要なし）	影響されにくい	違いはない

①の別居の親・子どもという1親等の親族については、郡部（農村部）と市部（都市部）であり差がなかった。②の別居の兄弟姉妹との交際（特に姉・妹関係や姉・弟関係）は、この調査の対象者に限って言えば、郡部より、交通の便がよく対象者の年齢も若い市部の方が、盛んに行なわれているという印象を受けた。③のいとこやおじ・おばなどやや遠い親族との交際については、郡部のほうが多い。しかし郡部でも、すべてのいとこやおじ・おばについて交際が盛んなのではなく、近くに住んでいるいとこやおじ・おばとの交際が

盛んなのである。このことから、市部より郡部のほうが、いとこやおじ・おばが近くに住んでいることが多く、そのために交際が多くなるのではないかとと思われる。最後に④のこれら以外の親族との交際は、冠婚葬祭程度であり、郡部（農村部）と市部（都市部）であまり差がなかった。

この結果から、次のようなことがいえるのではないか。①のカテゴリーの親子関係については、交際の選択性の度合いが低いため、郡部と市部で交際のあり方にあまり差はない。しかし、②や③のカテゴリーの兄弟姉妹やいとこやおじ・おばは、交際するか否かの選択性が高まるため、地理的距離や交通の便利さ、当事者たちの健康状態などが、交際の頻度を左右するのではないか。②の兄弟姉妹については、現代のように、婚姻が地理的距離が離れた地域間で行なわれるようになった社会においては、兄弟姉妹は離れて暮らしていることが多い。一般に農村部より都市部の方が公共交通手段が発達していることからすると、農村部より都市部の方が兄弟姉妹間の交際が維持されやすいのではないだろうか。また、高齢になってからより若いうちの方が、移動がしやすく交際が維持しやすいために、対象者に高齢者が多い郡部より、対象者が若い市部の方が、兄弟姉妹との交際をより頻繁に維持している結果になったということもあるかもしれない。一方③のいとこやおじ・おばについては、同じく選択性が高いが、市部より郡部の方でこれらの人々が近くに住んでいることが多いため、郡部でより頻繁に交際が維持されているのではないだろうか。最後に④のその他の親族については、日常的に交際する必要がほとんどなく、交際は冠婚葬祭などに限られるため、郡部と市部で交際の頻度に差がないのではないだろうか。これらのことは、今後、対象者の年齢をそろえたケース数の多い調査によって、検証する必要がある。

3. 非親族との交際

(1) 近所の人・近所の友人との交際

次に、親族でない近所の人・近所の友人、職場関係の人・職場関係の友人、その他の友人との交際を見ていこう。

まず、近所の人・近所の友人との交際をまとめた表8-6を見てみよう。

表8-6 近所の人・近所の友人との交際

	郡部		市部	
	女(計4)*	男(計5)	女(計5)	男(計5)
① 近所の人	4	3	2(?)	1
② 近所の友人	0	3	2	0

* 1ケースは、この質問項目の答えは不明。

まず①近所の人について見ると、郡部では、女性は有効回答者のすべて、男性も3ケース(5ケース中)が、食べ物のやり取り、家を訪ねて話す、地域の世話役をする、近隣の

人々と会食をする、一緒に出かけるなど、単なる挨拶や立ち話を越えた関係を近所の人と持っている。女性には食べ物のやり取りや家を訪ねる、男性は地域の世話役をしたり会食をするなどという人が多い。また「講」のようなものに参加している人が、男女ともにいた。次に、②近所の友人について見よう。近所に特定の友人と呼べる人がいるかどうかを見ると、「いる」と答えた人が、女性では0ケース（4ケース中）、男性では3ケース（5ケース中）で、男性の方が多い。これらの男性は、近所の友人と、一緒に遊びに出かけたりしていた。なかには、身の周りの世話を必要とする折には、その友人に車で通院に付き添ったり、在宅療養の折には食事を運んだりすることも頼めるという男性もいた。このことから、次のようなことがいえる。郡部においては、男女とも、近所の人とは近隣コミュニティのメンバーとしての関係を持っている。しかし女性においては、それが個人的な友人関係に発達することは少ないのに対して、男性は、その中から気の合った人と、個人的な友人関係を発達させている人が多い。

次に市部について見てみると、①の近所づきあいについては、単なる挨拶以上の関係を近所の人と持っていると答えた人は、女性では2ケース（5ケース中）であった。それ以外の1ケースは挨拶程度と答えているが、自分が入院した時には近所の人が見舞いに来ている。また他の2ケースは、インタビューの流れの中で特に言及が無いのだが、何らかの挨拶を越えた近所づきあいをしている可能性がある。それに対して男性では、挨拶を越えた近所づきあいをしているのは、1ケースだけだった。次に、②の近所での友人について見ると、近所に特定の友人がいると答えた人は、女性では2ケース、男性ではゼロであった。以上から市部では、男性は近所の人とは、挨拶以上の交際をほとんどしていない。しかし女性は、近所の人と日常のちょっとした助け合いの関係を持っており、またその中の一部は、個人的な友人関係に発展していることがわかった。

郡部と市部の男女を比べると、近隣関係から個人的な友人関係を発達させることが多いのは、郡部では男性だが、市部では女性である点が興味深い。なぜそうなのであろうか。郡部では近隣コミュニティの力がまだ強いので、女性は一家の主人の妻という役割を期待され、個人としては振舞いにくい。そのため、個人的・選択的な友人関係を発達させることができない。インタビューの女性回答者の1人は、妻が夫より前に出て振舞うと、コミュニティの人々からそれとなく非難されるという内容のことを述べている。一方郡部の男性は、近所の人との付き合いを土台として持っており、さらにその上に（一家の主人という名のもと）個人として振舞うことができるので、近隣関係の土台から個人的・選択的な友人関係を発達させることができる。これに加えて、個人的友人関係は義務的關係ではなく、その重要な要素の1つは「一緒に楽しむ、一緒に遊ぶ」ということである（Allan, 1979）⁽¹⁾。この点から考えると、郡部の男性は、「家の外で他人と遊ぶ」ことを家族やコミュニティから許容されているが、女性はあまり許容されていないため、個人的友人関係が発達しにくいということもあるかもしれない。

それに対して市部では、近隣コミュニティの力が弱まっているため、男性は近隣コミュニティにおいて役割がなく、友人関係はおろか通常の近隣メンバーとしての関係も持っていない。一方女性は、日常生活の必要から近隣との関係のある程度持っている。それに加えて近隣コミュニティの中で個人として振舞うことができ、また「家の外で他人と遊ぶ」ことに対して家族やコミュニティが寛大であるために、近隣関係の中から、気のあった人と個人的・選択的な友人関係を発達させやすい。このようなことがいえるのではないだろうか。

(2) 職場関係の人・職場関係の友人との交際

次に、職場関係の人・職場関係の友人との交際について見よう。表8-7にまとめたように、郡部では、「同僚あり」の人が少ないので、はっきりしたことはいえない。

市部については、女性の回答者5ケース全員が、パートタイムあるいは自営で仕事をしていた。そして男性だけでなく女性も、職場に友人が「いる」と答えている人がかなり多い。たとえパートタイマーでも、その職業を長く続け、1週間、1日のうち多くの時間をそこで過ごしているならば、そこから個人的な友人関係が発達するようである。したがって、「職場での人間関係はおもに男性のもの、女性はたとえ職業を持っていても職場にはあまりコミットせず、家族を重視する」といったステレオタイプがあるが、これは、女性の職場進出が進んでいる現在、見なおす必要があるかもしれない。また市部の男性では、職場の友人といっても、会社という文脈を離れ、休日と一緒に出かけるといった付き合いをしている人はほとんどいない。職場の友人といってもそのほとんどは、会社の中でちょっと気の合う仲間たち、年に数回会社の帰りに一緒に飲みに行く人たちなどであり、あまり個人的とはいえない付き合いである。

表8-7 職場関係の人・職場関係の友人との交際

	郡部		市部	
	女(計4)*	男(計5)	女(計5)	男(計5)
①職場関係の人 (有職)	3	3	5	4
----- (同僚あり)	2 **	1 **	4 **	4
②職場関係の 友人	1	1 (+1) ***	3	4 (+1) ***

* 1ケースは、この質問項目の答えは不明。

** 自宅で内職をしている人や家族での自営業の人は、家族以外の同僚がいないので、「同僚あり」とはみなさず、数値に含めていない。

*** 現在は退職して(あるいは退職して家族農業に従事して)無職で同僚なしの人が、退職前の職場の友人をあげたケースが2ケースあり、それを(+1)と示した。したがってこの(+1)は、「有職」や「同僚あり」の数値の中には含まれていない。

(3) 近所・職場関係以外の友人との交際

最後に、近所・職場関係以外の友人との交際について見てみよう。

表8-8にまとめたように、郡部では、近所・職場関係以外の友人が「いる」と答えた人は少ない。これは、郡部の対象者が相対的に高齢であることの反映かもしれないが、それに加えて、郡部ではサークルや各種教室など人々が地縁・職場縁を離れて知り合う機会が少ないという地域差の結果かもしれない。それに対して市部では、女性の4ケース、男性の3ケースが、近所や職場関係のつながり以外のところで知り合った友人を持っている。女性では、子どもの学校時代に子どもを通じて知り合った友人や、趣味のサークルや習い事で知り合った友人が多い。特にサークルや習い事の友人とは、しばしば一緒に出かけるなど現在も活発な交際が続いている。一方男性の3ケースはすべて、学生時代の友人であり、年に1度会う程度の交際である。

表8-8 近所・職場関係以外の友人との交際

	郡部		市部	
	女(計4)*	男(計5)	女(計5)	男(計5)
近所・職場関係以外の友人	2	1	4	3

* 1ケースは、この質問項目の答えは不明。

(4) 非親族との交際のまとめ

以上から、郡部と市部の、男女の、非親族との交際の特徴をまとめると、表8-9のようになるだろう。

表8-9 非親族との交際に見られるジェンダーと地域による違い

		文脈依存型の交際	非文脈依存型の交際 (個人的な友人)
郡部	女性	○ (おもに近隣)	×
	男性	○ (おもに近隣)	○ (おもに近隣関係)
市部	女性	○ (近隣+職場+育児)	○ (近隣+職場+サークル・習い事)
	男性	○ (職場)	×

Allan (1979) は、人々の交際関係を「分脈依存型の交際」(近隣、職場などあるグループに所属していることからしなければならない交際)と、「非分脈依存型の交際」(交際がもともと発生した文脈から離れても維持される交際)に分け、個人的な友人関係とは非分脈依存型の交際関係であると述べている。この考え方を援用すると、郡部の男女については、分脈依存型の交際として、近隣コミュニティのメンバーとしての交際の比重が高い。そして郡部の男性は、先に論じたように、近隣関係から発展した近隣での個人的友人関係

を持っているが、女性は持っていない。一方市部においては、分脈依存型の交際としては、女性は、近隣、職場、子育てなどの交際関係を持っており、男性は職場の交際関係を持っている。そして女性は、近隣、職場、子育てなどから、個人的な友人関係を発達させたり、またサークルや習い事などいわゆるボランタリー・アソシエーションに参加して、その中から個人的な友人関係を発達させている。一方、市部の男性における職場関係の交際は、職場という文脈の中で維持されており、その文脈を離れて休日と一緒に出かけるといったような個人的な友人関係に発達してはいないように思われる。つまり、個人的な友人関係は郡部の男性と市部の女性がよく発達させており、一方、文脈依存的な関係は、郡部の女性（近隣コミュニティという文脈）と市部の男性（職場という文脈）がよく発達させているといえるのではないか。

個人的な友人関係は、その人の生活環境が変わり交際の文脈が変わっても、それなりに生き続ける可能性が高い。また文脈依存的な関係の中でも、近隣コミュニティという文脈は生涯続き、人々にその中で役割や交際の機会を提供し続ける。しかし、職場という文脈は退職とともに終わる。したがって、高齢期における交際関係の新たな構築という課題が最も強く突きつけられるのは、市部の男性なのである。市部の男性の中にはこのことを見越して、自宅マンションの管理のための自治組織に自らすすんで参加し、近隣コミュニティにおける絆を育てそれに貢献しようとしている人がいた。また別の人は、退職後も前の職場の仲間と月1回定期的に集まり、ゴルフをしたり会食をしたりするグループを作っている人もいた。このような関係は、職場という分脈を離れた関係として、Allan のような個人的友人関係になっていくのかもしれない。このように人々は自分が置かれた状況にしたがって、様々な非親族との交際関係を維持しようとしているのである。

4. おわりに

以上から、人々の交際のあり方は、地域組織のあり方、男性・女性それぞれにその地域で期待される役割、交通機関の発達具合、あるいは年齢（ライフサイクル）によって、異なっていることがわかった。

また都市部と郡部、あるいは男性と女性の人間関係についてのステレオタイプと異なる発見もあった。第1に、「郡部の方が親族関係が緊密である」というステレオタイプとは異なり、都市部の方が兄弟姉妹、特に姉妹間の交際は盛んであった。第2に、「郡部の方が近隣関係が緊密である」というステレオタイプがあるが、分脈依存型の交際と、文脈に依存しない個人的な交際関係を区別すると、郡部の女性はたしかに文脈依存的な交際は豊かであるが、個人的友人関係はそれほど豊かではないことがわかった。逆に市部の女性は、かなり豊かな個人的友人関係を持っていた。第3に、「女性にとって職場での人間関係は、家庭や近隣での人間関係に比べてあまり重要でない」というステレオタイプがあるが、これとは異なり、現代の女性（特に都市部の女性）は、たとえパートタイマーでも、職場での

交際関係を多く持っており、それはその女性の交際関係のなかでかなり重要な位置をしめている（人によっては近隣関係より重要である）ことがわかった。

ただしこれらは、少数のインタビュー調査から得られた知見であり、今後より大きな標本の調査で検証していく必要があろう。

【注】

(1) 「家の外で遊ぶ」ことと個人的友人関係との関連については、山根真理氏から示唆を受けた。

【文献】

Allan G., 1979, *A sociology of friendship and kinship*, London: George Allen and Unwin.
大和礼子, 2000, 「“社会階層と社会的ネットワーク” 再考: 〈交際のネットワーク〉と〈ケアのネットワーク〉の比較から」『社会学評論』51(2): 235-250.